

WANTED



シカ

約 **76** 億円



イノシシ

約 **55** 億円



カラス

約 **18** 億円



サル

約 **13** 億円



その他鳥類 (ムクドリ、スズメ等)

約 **17** 億円



その他獣類 (クマ、アライグマ等)

約 **20** 億円

資料：農林水産省作成 ※注：数値は当該鳥獣による平成25年度の農作物被害額

野生鳥獣と向き合う

野生鳥獣による農作物などへの被害は年々深刻化しています。

農作物の被害額は毎年200億円前後に及んでおり、

全体の約7割がシカ、イノシシ、サルによるものです。被害を防止する対策や、捕獲した野生鳥獣を食肉(ジビエ)などに活用する動きが、全国で進められています。

取材・文／岸田直子(P.4～8)、宮内亮司(P.9) 撮影／島 誠(P.10～12)

イラスト／岡本健太郎 ©岡本健太郎／講談社

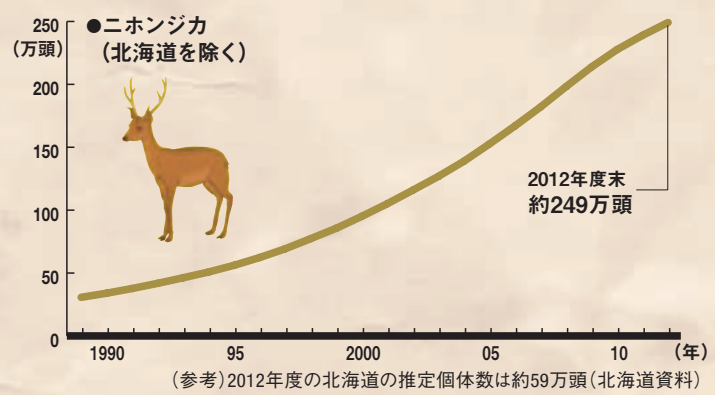
(イラストは漫画『山賊ダイアリー』からの引用です)



シカ・イノシシが増加する一方、狩猟者は減少しています

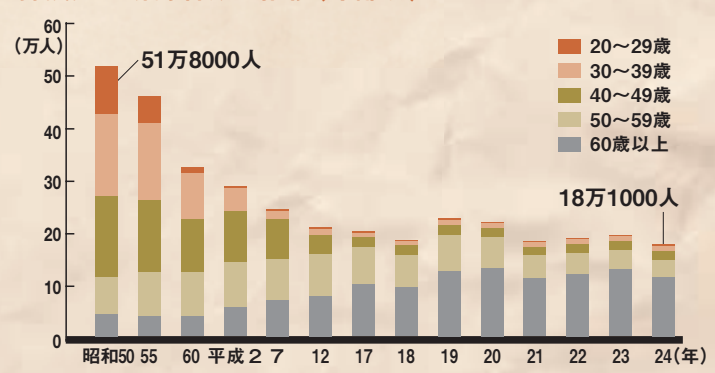
シカやイノシシの数は増加していますが、狩猟免許を所持する狩猟者は減少の一途。その半数以上は60歳以上と、高齢化が進んでいます。

個体数の推移(推定)



資料：環境省「統計手法による全国のニホンジカ及びイノシシの個体数推定等について」より作成 ※注：数値は全国の個体数推定の中央値

狩猟免許所持者数の推移(年齢別)



資料：「平成27年版 環境・循環型社会・生物多様性白書」より作成
※注：近年7年間は毎年集計、それ以前は5年ごとの集計



CASE2

イノシシ

雑食性で、地中の植物や昆虫なども掘り返して食べてしまう。田畑に侵入して農作物を食い荒らしたり、泥を体にこすりつける「ぬたうち」を行う



CASE3

サル

植物を中心にした雑食性で、十数頭から百数十頭までの群れで行動するのが特徴。集団で来て果物や野菜などを食べ散らかす。家屋に侵入したり、人に危害を加えることも



写真提供／埼玉県



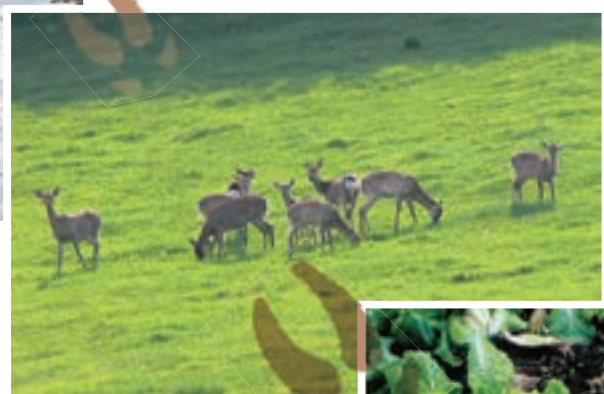
野生鳥獣による農作物被害が深刻化しています



写真提供／長野県



写真提供／北海道



写真提供／信州大学・竹田准教授

CASE1

シカ

草食性のシカは食欲が旺盛で、農作物に加え、ほとんどの種類の植物を食べる。柵を飛び越えて侵入するうえ、背が高いので地上2m近い高さの植物や樹皮までが被害に



写真提供／神奈川県



深刻な鳥獣被害に農家が悲鳴！

農作物を食い荒らす

シカ、イノシシ、カラス等に農作物が食べられるなどの鳥獣被害。農家のやる気まで奪ってしまう、深刻な問題です。

一年の働きが
一晩で水泡と化す

「朝、畑に行ったら、収穫間際のキャベツがシカに食べられていた。今季の仕事が水の泡だ」
そう語るのは野菜の栽培農家・Aさん。設置していた柵を飛び越えて侵入してしまった、と嘆きます。

「うちは収穫直前にイノシシに入られ、稲がなぎ倒された。臭いがついてしまつて出荷できないから、これまでの苦労が一晩でパーだ」
稲作を営むBさんも頭を抱えて暗い表情。これまでも多くの被害に遭ってきた2人は「もう農業をやるのがイヤになった」と、精も根も尽き、疲れ切った様子です。

野生鳥獣による農作物被害額は、毎年200億円前後。被害額が大きいのは北海道、福岡県、長野県、宮崎県、兵庫県などで、被害の7割がシカ、イノシシ、サルによるものです。特に近年、シカ、イノシシの被害が増加しています。

動物園やテレビなどで目にするイノシシやシカは、かわいいイメージですが、農家にとっては天敵以外の何者でもありません。丹精込めて育てた農作物を一晩でダメにし、暮らしの糧を失ってしまう…。農家にとって鳥獣被害は、まさに死活問題なのです。

このほか、農業被害に限らず、車両との接触事故や、家屋・文化財の破損、人身被害など、生活環境や生態系への影響も深刻化しています。

野生鳥獣は増加し、高齢化で狩猟者は減少

では、どうして鳥獣被害がこれほど深刻化してしまったのでしょうか。

古来から農耕が盛んだった日本では、動物と人間の間に常に軋れきがありました。人々は山の中やふもとに小屋を作つて寝ずの番をして鳥獣の侵入を防いだり、防護柵を設置したり、弓矢や落とし穴で捕獲していたのです。食糧の乏しかった時代は、シカやイノシシの肉は貴重なたんぱく源として食べられ、狩猟と農業との兼業で生計をたてる人たちも少なくありませんでした。

しかし、近年になって農山村の過疎化が進み、農業従事者の減少に伴って営農条件の悪い中山間地を中心に耕作放棄地が増加。野生鳥獣の生息地域が広がり、生息頭数が増えます。一方で、捕獲の担い手である狩猟者は減っており、高齢化が進んでいるのが現状です。

野生鳥獣は増え、狩猟者は減る。日本の農業の明るい未来のために、抜本的な対策が求められています。

野生鳥獣が増えすぎた地域では、田畑への侵入を防ぐ柵を設置したり、追い払ったりするだけでは、被害を防止することは難しい状況です。

そこで、国がいま最も力を入れているのが、わなや猟銃などを使用して野生鳥獣を捕獲し、生息頭数を減らす対策です。

農林水産省では、この対策を進めるため、野生鳥獣の捕獲に必要な狩猟免許所持者を育成する講習会や射撃場の整備、箱わなや囲いわな等の捕獲機材導入などの支援を行っています。

また、近年では、捕獲した鳥獣を埋めたり焼却したりするだけでなく、地域資源として有効活用するために、食肉処理加工施設の整備や商品開発、販売・流通経路の確立などの取り組み、食肉利用の専門家による研修会の開催なども支援しています。

こうした取り組みは、捕獲頭数の増加につながることはもちろん、村起こし・地域活性化にもつながると考えられます。

野生鳥獣を捕獲し、適正数まで減らす

〔捕獲〕



写真提供／千葉県茂原市経済環境部農政課

生息頭数を調整

わな(上)、銃(右)、網で野生鳥獣を捕獲。ITを活用した自動監視システムを備えたわなも開発・利用されている



写真提供／長野県伊那市



サルを群れごと捕獲するために設置された、大型の捕獲おり

ニホンザル

“群れごと”捕獲、一網打尽に!

シカやイノシシと違って、群れで行動するサル。「ボスザルを捕獲すればよいのでは?」と考えがちですが、ボスを失った群れは分派して拡散し、さらに群れの数が増えてしまう恐れがあるのです。

そこで、被害対策も群れごとに講じる必要があります。群れの全頭を捕獲する大型のサルの設置や、犬などを活用して農地や集落の外に追い出す「追い払い」、山奥に定住させて集落に出てこないようにさせる「追い上げ」などの対策で、加害群数の半減を目指しています。



写真提供／鳥獣被害対策.com
撮影／小淵幸輝



目標 シカ・イノシシの生息頭数
サルの加害群数

10年後までに半減

シカとイノシシは平成35年度までに約210万頭へ、サルは被害を及ぼす群れの数半減を目指しています

地域ぐるみで目標達成へ



1 地元の農家、猟友会、研究機関などの共同作業で柵を設置(岐阜県郡上市) 2 捕獲のためのわなを仕掛ける(福島県田村市) 3 鳥獣被害対策実施隊でイノシシを捕獲(高知県幡多郡黒潮町) 4 猟銃免許を持つ猟友会員らが一斉捕獲に向かう(岩手県奥州市)

全国各地の被害対策を積極的に支援

今でさえ深刻な鳥獣被害ですが、このままの捕獲ペースでいくと、シカの場合、平成37年度には現在のほぼ倍の500万頭まで増加するという試算もあり、農林業や生態系にさらに深刻な被害をもたらすことが懸念されています。

農林水産省では、野生鳥獣による被害を防止するため、市町村が作成する「被害防止計画」に基づく「捕獲」や、野生鳥獣の侵入を防ぐ「被害防除」、エサ場や隠れ場所をなくす「生息環境管理」など、地域ぐるみの取り組みを支援しています。

また、市町村における被害防止対策の担い手である「鳥獣被害対策実施隊」の設置や体制の強化を推進。今年度中に全国で1000市町村を目標に、設置促進に向けた普及活動などを行っています。

さらに、環境省と連携して、深刻な被害を及ぼしているシカ・イノシシについて「生息頭数を平成35年度までに半減」という目標を設定。抜本的な鳥獣捕獲対策を実施しています。

この目標を達成する上では、捕獲従事者の育成と確保が大きな課題です。

ストップ! 鳥獣被害 被害防止に向けた活動が 全国で進められています

増え続ける野生鳥獣にどう向き合っているのか。捕獲強化などの抜本的な取り組みが、全国各地で展開されています。



山の恵みとともに生きる 八木沢マタギの 狩りと暮らし

山でクマなどを狩る「マタギ」と呼ばれる人々。
あまり知られていない彼らの生活を、
実際にマタギの家で育った“マタギ文化の語り部”
佐藤良美さんに聞きました。



(左) 八木沢集落最後のマタギ、佐藤良蔵さん
(上) 昭和40年代の八木沢集落。当時はどの家もマタギだった。舗装された道路が通る今の集落に、マタギはもういない

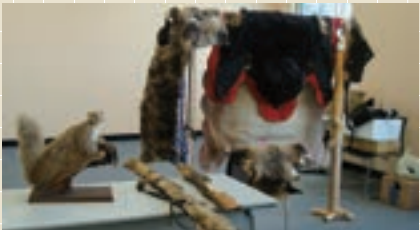
秋 田県の阿仁地域で発祥し、周辺へと広がった狩りの集団が「マタギ」です。私が育った八木沢もマタギが暮らす集落で、私の家も代々マタギの家系。父の良蔵もマタギでしたが、猟をするのは基本的に11月から春先にかけての猟期だけで、職業としての猟師ではありませんでした。江戸時代には、各地へ出向いて生業としての猟を行う「旅マタギ」がいたことが資料から分かっていますが、戦後、職業としてのマタギはいなくなったようです。

マタギはツキノワグマやウサギ、バンドリ(ムササビ)、マミ(アナグマ)、ヤマドリなどを獲物としていました。猟で山に入る前には、女性が近づくことは厳禁。これは山神様をまつるマタギの習わしの一つで、厳格に守

られていました。山の中では独特のマタギ言葉を使って話すことも特徴で、私はほとんど理解できなかったことを覚えています。父をはじめ、普段のマタギたちは温厚ですが、猟のときの姿はまさに鬼。遠くにいる獲物を目ざとく見つけて、射止めていました。獲物は一発で射止めるのが習わし。そこには「獲物を苦しませずに成仏させる」という思想もあったのかと思います。

中でも特別な獲物とされていたのがクマ。山神様からの授かりものとして、その肉は集落全体で平等に分けられました。肉を配って歩くのは子どもの役目。これも昔からの習わしで、「クマを恵んでくれた自然に感謝し、その感謝によってクマが成仏する」という儀礼を、肉を配ることによって後

継者に伝える意味もあったのでしょうか。2009年に父の良蔵が引退し、八木沢集落からはマタギがいなくなりました。13年に父が亡くなるまで、時には酒を酌み交わしながらマタギの話を聞いたものです。マタギを継がなかった私には、その本当の姿は分かりませんが、私の知り得た限りのマタギの姿を、後世に伝えていこうと思っています。



定期的に行われる「八木沢マタギを語る会」では、はく製やマタギの道具などを展示することも



佐藤良美さん

1954年、佐藤良蔵氏の三男として八木沢集落に生まれる。太平山地で希少種、猛禽類の調査・研究に携わる一方、近世の旅マタギ(秋田マタギ)の調査・研究も行う。2009年に「八木沢マタギを語る会」を発足、マタギ文化を語り継ぐ活動をしている

マタギを支えた道具たち

1 牛革で作られた火縄銃の背負い袋。江戸末期頃に使われ、雪の上でも濡れたり凍ったりせず、寒中の猟に重宝した 2 佐藤家に代々継承された槍。右の槍の穂先の断面は三角形で溝があり、八木沢近隣では見られない形状。新潟県村上市三面で作られたものと思われ、昔のマタギがさまざまな地域と交流があったことの証拠の一つ 3 全長122cmの小槍も受け継がれてきたもの。こちらは阿仁地域伝統の形状で、八木沢マタギが阿仁の流れをくむことが分かる



写真提供／北海道



写真提供／鹿児島県姶良市

[被害防除]

電気柵は正しく設置を!

人に対する危険防止のため、危険である旨の表示をすることや、漏電遮断器の取り付けなど、設置方法が電気事業法で定められています



柵の設置や 追い払い活動

電気柵(左)を設置したり、エアガンによる追い払い(下)を行い、野生鳥獣を田畑に近づけないようにする

写真提供／
農研機構・中央農業総合研究センター

一方、生息環境管理とは、野生鳥獣のエサ場や隠れ場所を作り出さないこと。出荷できない農作物などを農地やその周辺に置きっぱなしにしない、やぶや茂みを刈り取って緩衝帯を設けるなど、被害を招くことになる環境を作り出さない対応も必要です。また、被害状況は地域ごとに異なります。農林水産省では、地域に応じた被害防止計画の作成や対策を助言する被害対策アドバイザの紹介のほか、ホームページを通じて、優良活動事例などの各種情報提供を行っています。

被害防除とは、野生鳥獣が田畑へ侵入するのを防ぐ柵の設置や、追い払いなどのこと。野生鳥獣にとって魅力的な農作物の味を覚えさせない、田畑に近寄らせないためには、効果的な対策が必須です。柵にはワイヤーメッシュ柵、金網柵、電気柵、ネット柵があり、獣種や地形などに合わせて、効果が発揮されるように設置することが大切です。

捕獲による効果が現れるまでには時間がかかり、必ずしも計画通りにいかない場合があります。そこで、捕獲と同時に必要なのが「被害防除」と「生息環境管理」の対策です。

[生息環境管理]

写真提供／福井県鯖江市



エサ場や 隠れ場所を除去

野生鳥獣が身を隠せるやぶや茂みを刈り取り(上)、農地との間に牛を放牧(左)することで、田畑に近づけないようにする



写真提供／農研機構・
中央農業総合研究センター